

2. 合水堂と適々齋塾

江戸時代後期の大坂には、全国に名を知られた医学塾がありました。特に華岡鹿城(安永8～文政10年(1779～1827))・南洋(寛政9～慶応元年(1797～1865))の「合水堂(ごうすいどう)」と緒方洪庵の「適々齋塾(適塾)」は有名で、各地から多くの門弟が集い、それぞれに近代を開いてゆく人材を育成しました。伝統的な漢方医学の系譜上にある華岡塾と蘭方医学の緒方塾の塾生たちは、両塾の場所が近いこともあり、それぞれに意識しあうライバル同士でした。

合水堂

中之島山崎の鼻にあった「合水堂」は「華岡流外科」を中心に医学を教授する塾でした。「華岡流外科」とは、紀州(和歌山県)の在村医華岡青洲[宝暦10～天保6年(1760～1835)]が創始した医学の一派です。青洲は独自に研究開発した麻酔薬「通仙散」を用いて全身麻酔下での乳癌(にゅうがん)摘出手術に世界で初めて成功し、不可能とされていた外科手術の数々を可能にしました。青洲は生涯紀州の村に住し、多くの門弟を教えるかわら地域医療に尽力しましたが、弟の鹿城を促して、堺のち大坂で開業させ、多くの人々に「華岡流外科」の恩恵を浴する機会を提供しました。鹿城は、兄の意を受けて高度な医療活動に従事するとともに、私塾「合水堂」を開いて門弟を育成しました。鹿城の後には、青洲の養子の南洋が「合水堂」を継承しました。



華岡青洲像 1幅 江戸後期 本館蔵

正装した青洲の肖像。賛は合水堂の主人華岡南洋。同様の画像は各地で知られるが、これは華岡塾を卒業した門弟が帰国する際に南洋らが賛を付して与えたことによる。豊前中津(大分県中津市)の医家大江家にも南洋賛の青洲像が伝わるが、落款(らっかん)印が逆印になっており、南洋が心ならずも大江氏の帰国を認めたものと思われる。



中津大江家旧蔵の青洲像落款印

(中津市歴史民俗資料館分館大江医家資料館蔵)